

# 上海日本人学校浦東校における特別支援教育の校内体制構築と実践

前上海日本人学校浦東校 教諭

大阪府羽曳野市立西浦小学校 教諭 高 取 貞 光

**キーワード：在外教育施設，特別支援教育，校内支援体制，学びの共同体，連携と融合**

## 1. はじめに

通常の学級内で、障害をもつ子どもの対応について研究を深めてきた。教材に重きをおいた教材研究とは違い、個人の特性に焦点をあて、学校生活の支援や授業での支援について考えてきた。それを担任だけでなく、職員一同で理解を図り、保護者や、外部機関と連携・融合する中で、教育に取り組んできた。ここにその概略を紹介したい。

## 2. 着任直後の特別支援

上海には、虹橋校と浦東校の2校の日本人学校がある。虹橋校は小学部だけで、浦東校は小学部と中学部があり、平成23年度から高等部が設立された。いわゆる小・中・高の一貫教育である。どちらの学校にも特別支援学級がある。在外教育施設でも特別支援教育を必要としていることは日本で勤めていた時から聞いていた。対応を求めている子どもや保護者に会ったり、独自の教職員へのアンケート調査をしたりして特別支援教育の校内体制を構築していくことになった。

上海日本人学校浦東校の児童・生徒は、障害の有無に関わらず全員通常学級に在籍し、必要に応じて『すずかけ教室（特別支援教室）』に通級するという体制をとってきた。入学や編入の時の事前面談で、その年の現状を踏まえて判断される。また、ADHDやLD、高機能自閉症といった軽度発達障害の対応については、具体的な組織的対応はなく、担任に任されている。着任直後には、軽度発達障害の理解や対応についての研修会が始まったところで、特別支援についての教職員の理解も広がりつつあった。

## 3. 特別支援の対象となる児童・生徒の実態

2010年の本校の小学部は528人、中学部は546人在籍しており、合計1074人の児童・生徒が在籍している。学級数は、小学部は21クラス、中学部は17クラスであった。あるデータでは、6%の子どもに障害の可能性があると言われている。本校でも、教職員向けに軽度発達障害、または何らかの障害の疑いがあるかというアンケートをとった。既に特別支援学級に通っている子どもを除いて、10人ほど見受けられた。特別支援学級に在籍する子どもを含むと13人ほどである。私たち教職員の理解不足なのか、それとも在外教育施設の特徴なのか不明な点は多い。学習面で困難な子ども、社会性で困難な子ども、友達との関係を築くのが困難な子ども、そして小学生から中学生と年齢も幅広いので、対応も様々になる。その子どもたちの中には、医者から診断を受けているケースや専門家からWISKⅢの検査を受けている子どももいる。本校にはカウンセラーもいて、そこに通う保護者の子どももいる。障害の実態や教室での適応具合を見て、どれだけの時間に特別支援学級に通うのかを決める。あくまでも在籍は通常学級である。

## 4. 校内組織体制

### (1) 校内組織

特別支援部には支援学級担当4名、小学部コーディネーター1名、中学部コーディネーター1名の6名で組織をスタートした。通常学級の経験のある先生と特別支援学級担当の先生を1グループにして、計3グループをつくり、対象の児童・生徒の担任と対応を図る。

実態把握や児童・生徒の観察を通して個別の指導計画をチームで作成する。保護者には必ず周知するようにする。時には、協力して個別の指導計画を作成する。

## (2) 外部機関との連携

上海国際クリニックという日本人向けの病院があり、医師や臨床心理士の資格をもった専門家がいて、本校のスクールカウンセラーになっている。支援対象の児童・生徒のカウンセリングだけでなく、WISKⅢの検査をして、保護者の了解を得た上で、学校に報告をして頂くケースもある。このような連携だけでなく、協議にも参加して頂き、専門家の意見を取り入れながら個別の指導計画を作成するなど、専門家・学校・保護者の意見を融合して取り組む事例もあった。

## 5. ユニバーサルデザイン

ケース会議では、教材だけでなく教室環境や学級経営方針、児童・生徒・保護者との関わり方、教材教具の活用などが話し合われた。通常の教材を研究する校内研修では取り上げられない内容が議論となった。支援対象の児童・生徒に焦点が当てるが、学級担任は学級にはっきりとした方針をもって対応しなければいけない。個にばかり目が向き過ぎると学級内の他の児童・生徒が落ち着かなくなるというケースも実際にあった。話し合いを通して、支援対象の児童・生徒だけでなく他の児童・生徒にも支援になる対応を探っていくこと、いわゆるユニバーサルデザインの授業や対応を考えていくという結論に至った。この年のケース会議を踏まえて、最終的に職員会議で報告したことが、以下の内容である。

- 具体的に簡潔な説明や指示をする。
- 聴覚と視覚のどちらの情報処理を得意とするかを知る。
- 絵や写真、具体物を利用して理解を図る。
- 褒めることを増やす。

よく言われる内容でもあるが、その必要性を再度、認識することになった。また、同時に校内では『学びの共同体』ということをテーマに、研修が進められた。そこで、小グループでの学習の中で、特別支援対象の児童・生徒に焦点を当てた学び合いを進めていく上で、どのような課題が生まれ、どのような支援が必要かを考えることになった。個が集団へと適応していくためにどのようなアプローチをしていく必要があるのかを探ることになった。これが2010年度末の最終提案となった。

## 6. 最後に

家族が、話し合って子育てをするように、学校でも関わる教師がお互いの考えを出し合って話し合い、育てていくことが大事であることを改めて感じた。日本人学校ということもあり、いろいろな地方から教師が集まる。教育の在り方も多様で、一つになれば大きなエネルギーとなることを感じるが、逆に難しさもあり、まとまらなければ力は発揮できない。また保護者にはありのままの情報を伝え、保護者からの思いや考えを聞き、個別の指導計画に取り組んできた。家庭で工夫されていることが、学校でも活用できるというケースもあり、対応の幅を広げることもつながった。

海外ということもあり日本ほど外部機関との充実した連携はできないが、上海日本人学校に関わる専門家に積極的に協力して頂いたこともあり、充実した校内支援体制を構築して行くことができた。保護者や外部機関との指導目標や指導内容に共通意識をもつということ、連携から融合へと至る中で、新しい発想を生み出し対応を見つけていくということが、子どもの成長をさらに促していく。

子どもの『学びの共同体』だけでなく、私たち大人も子どもに焦点を当て『学びの共同体』をつくり支援力や指導力を高めていかなければならない。さらに、支援や指導のストックを増やしていき、障害のない子どもに対しても共通して言えるユニバーサルデザイン的対応を考え、教職員全体へと発信していくことが、多くの子どもたちの成長をさらに加速させていくことだと思う。